

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

言語文化研究室

藤田尊潮教授

こちらは当館に所蔵がない資料です。

TAC（多摩アカデミックコンソーシアム）の図書館や国立国会図書館（要個人登録→デジタル資料利用可）から利用できますので、ご希望の方は1階カウンターへお越しください。

『モイラ （ジュリアン・グリーン全集；4）』

ジュリアン・グリーン〔著〕、
福永武彦 訳、人文書院、1980

国立国会図書館 デジタルで可
東京外国語大学にあり



東京外国語大学

『モイラ（Moira）』は1950年に刊行されたジュリアン・グリーンの中期を代表する長編小説である。「モイラ」というタイトルは作中人物のひとりの少女の名前から取られたものだが、それはギリシャ語の「Μοίρα（宿命）」に由来する。『モイラ』は殺人をテーマにしている点で初期の長編の代表作『アドリエヌ・ムジュラ』に類似している。物語は1920年のアメリカ、ヴァージニアの大学都市が舞台になっているが、アメリカ人の両親のもとでパリに生まれ、自身アメリカ、ヴァージニア大学で教育を受けたグリーンが学生時代の記憶が色濃く反映されている。主人公は片田舎からやってきた純朴で人慣れのしない18歳の青年ジョゼフである。田舎者のジョゼフは大学でも好奇的となる。彼の外見上のもっとも大きな特徴は「赤毛」と白い肌であり、「赤毛」ゆえに嫌われもするが好かれもする。狼狽な学生たちの中で、厳格なプロテスタントの信仰の持ち主であるジョゼフは孤立感を深める。そんな中、彼は下宿先の女主人に養女として育てられている不思議な少女モイラに出会う。「予定説」を信奉するジョゼフはなにより「情欲」の「罪」を恐れている。しかしモイラの魅力に逆らうことができず、ジョゼフは「情欲」を憎むゆえに美しい少女を殺してしまう。グリーンは「肉体」と「精神」、「罪」と「ゆるし」というキリスト教的視点から、カルヴァン派が掲げる「予定説」の誤りと純粹であるがゆえに「罪」を犯してしまう青年の心の葛藤を視覚的なイメージを多用し印象深く描いている。

『アドリエヌ・ムジュラ （ジュリアン・グリーン全集；1）』

ジュリアン・グリーン〔著〕
新庄嘉章 訳、人文書院、1979

国立国会図書館 デジタルで可
東京外国語大学、国際基督教大学、東京経済大学にあり



東京外国語大学

『アドリエヌ・ムジュラ』はジュリアン・グリーンの2作目の小説であり、初期の長編の代表作である。ジュリアン・グリーンの小説作品の大きな特徴のひとつだが、ほとんどの場合、小説は作中人物を取り囲む情景の克明な描写から始まる。彼らを取り巻く世界は作中人物の目を通して、自然に作中人物の視線と重なり合い、彼らの内面へと潜入する。ムジュラ家はパリ郊外の町に住んでいる。小説の書き出しで、「語り手」は客間に飾られた肖像写真について、掃除をするアドリエヌの視線を追うようにひとつひとつ丹念に描写する。それは12枚の白黒の肖像写真だった。アドリエヌはそこを「墓地」と呼ぶ。物語は「死」の雰囲気の中で展開する。18歳の少女アドリエヌは年の離れた姉と父親のもとで始終監視され、自由がなく、行き詰まるような生活をしている。彼女は近所の医師モールクールに恋をするが、父親はアドリエヌを理解するどころか、彼女を幽閉する。ある晩アドリエヌは自室に入り込もうとしてらせん階段を上ってくる父親を階下の闇の穴に突き落として殺してしまう。彼女には自分が殺したという自覚はない。この小説ではグリーンにはまだカトリック的ヴィジョンについての明確な意識はなく、キリスト教的要素は物語の背景のひとつとして埋め込まれているに過ぎないように見える。小説は「闇」の「黒」と「明かり」の「白」という強烈な対比を背景に、「内的独白」や「自由間接話法」という非常にデリケートな文体を用いて、孤独な主人公の内面を巧みに描き出している。

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

言語文化研究室
藤田尊潮教授

こちらは当館に所蔵がない資料です。

TAC（多摩アカデミックコンソーシアム）の図書館利用できますので、ご希望の方は1階カウンターへお越しください。

『価値を否定された人々： ナチス・ドイツの強制断種と「安楽死」』

中野智世，木畑和子，梅原秀元，紀愛子 著，
新評論，2021

国際基督教大学、津田塾大学、東京経済大学にあり



東京経済大学

第2次世界大戦の戦前戦中を通じて、ナチ体制下のドイツではユダヤ人だけではなく、病気ハンディキャップのある人々、社会的弱者、当時社会規範から逸脱しているとみなされた人々が、優生学を背景とする政策により、価値のない社会の負担となる存在として強制的に断種され、さらに戦時下においては秘密裡に殺害されていた。強制断種人口30万人、安楽死は30万人とされている。より良き未来のため、有用な人間のため、全体のため、という大義名分によって尊厳と生命を剥奪されたのである。このような事例はドイツだけに限ったことではない。わたしたちは自国にも目を向けなければならないはずである。本書はこの事実と歴史を詳細、丁寧に明らかにしている。価値ある人と価値のない人を分けるという功利主義的思想は今現在においてもなくなったわけではない。むしろ、治療目的以外でも出生前診断が当たり前のように行われていることから推察できるように、優生思想は人口に膾炙しているのかもしれない。

「人間は数えることはできない」とサン＝テグジュペリは言った。現在の課題を考えるためにも、わたしたちはこのような考え方のもとで亡くなった人々の声に耳を傾けたいと思う。

『エンゲルス：マルクスに將軍と呼ばれた男』

トリストラム・ハント 著ほか，
筑摩書房，2016

国際基督教大学、津田塾大学、東京外国語大学、東京経済大学にあり



東京経済大学

サッカー好きならば、イングランド・プレミアリーグのマンチェスターシティとリヴァプールの試合に注目するだろう。イングランドではフットボールが19世紀後半、急速に普及した。19世紀は産業革命が進展し、帝国主義の拡大が特徴的な世紀だ。19世紀のマンチェスターは綿産業の中心地で急激な都市化により、スラム街が形成され、貧困や劣悪な労働環境が深刻化した時期だった。フリードリヒ・エンゲルス（1820–1895）は1842年にマンチェスターに滞在し、工場労働者の貧困を目の当たりにし、1845年、その経験をもとに『イギリスにおける労働者階級の状態』を発表した。当時のマンチェスターは、資本主義の発展とその矛盾が最も顕著に表れた都市でした。マンチェスターシティとユナイテッドの好敵手であるリヴァプールFCの本拠リヴァプールは19世紀、マンチェスターと鉄道で繋がり、港湾都市としてそれ以降も急成長をとげる。繁栄の一方で奴隷貿易、貧困などの影も抱えることになった。19世紀のフランスはナポレオン帝国崩壊、二月革命、パリコミューンを経る激動の時代であり、宗教においては二人の聖人が生を受けた世紀、文化的な分野では今もってその功績の色あせることのないフランス語大辞典を執筆した言語学者、実証主義者エミール・リトレを輩出した世紀だった。わたしは自宅にリトレの肖像写真を飾っているが、その眼差しはいつ見ても鋭く、圧倒される。19世紀後半の日本も又江戸幕府の終焉から明治時代へと変化する激動の時代だった。19世紀のドイツに改めて目を移せば、こちらも政治的統一の達成と産業化が進んだ時代だった。1848年の三月革命後、ドイツ各地で政治活動家への弾圧が強まる。マルクス、エンゲルスもドイツでの弾圧を逃れ、資本主義の中心地であるイギリスに渡り、研究と執筆を続けた。マルクスの『資本論』執筆をエンゲルスは支える。本書を紐解けば、19世紀という激動の時代を知ることができるだろう。21世紀という混乱し始めた？時代を生きるわたしたちへのヒントを見つけ出せるかもしれない。マルクスとエンゲルスとの間に友情とよぶより他にないなにかに、わたしたちはきっと驚くのではないだろうか。

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

言語文化研究室

藤田尊潮教授

こちらは当館に所蔵がない資料です。

TAC(多摩アカデミックコンソーシアム)の図書館から利用できますので、ご希望の方は1階カウンターへお越しください。

『かもめ（岩波文庫；32-622-1）』

チェーホフ 作，浦雅春 訳，岩波書店，2010

国際基督教大学、津田塾大学、東京外国語大学、東京経済大学にあり
1952版は当館にも所蔵あり（館内閲覧のみ）



当館所蔵 1952 版



津田塾大学

『三人姉妹：四幕のドラマ（ロシア名作ライブラリー；5）』

チェーホフ 著，安達紀子 訳，群像社，2004

東京外国語大学、東京経済大学にあり
1964版は当館にも所蔵あり（館内閲覧のみ）



当館所蔵 1964 版



東京外国語大学

『チェーホフ = Чехов：

七分の絶望と三分の希望（岩波文庫）』

沼野充義 著，講談社，2016

東京外国語大学にあり



東京外国語大学

『ワーニャおじさん（岩波文庫）』

チェーホフ 作，小野理子 訳，岩波書店，2001

国際基督教大学、津田塾大学、東京外国語大学、東京経済大学にあり
1963版は当館にも所蔵あり（館内閲覧のみ）



当館所蔵 1963 版



津田塾大学

『桜の園（岩波文庫）』

チェーホフ 作，小野理子 訳，岩波書店，1998

東京外国語大学、津田塾大学、東京経済大学にあり
1962版は当館にも所蔵あり（館内閲覧のみ）



当館所蔵 1962 版



東京経済大学

チェーホフは、上記の標題の戯曲を、「喜劇」と呼んだ。1980年、栗原小巻の演ずるニーナの舞台を観劇したことをおぼろげながら覚えている。それが「喜劇」とは到底思えなかった。『かもめ』においては、登場人物の夢や理想がことごとく裏切られ、現実打ちのめされる姿が描かれている。『ワーニャ伯父さん』では、夢や理想を持っていたとしても、どの登場人物もその思いが叶えられることはない。ソーニャの台詞、「私たちは休まず働きましょう。そして死んだら休めるわ」ということばはまさに象徴的だ。『三人姉妹』では、主人公の「モスクワに帰りたい」という願いは叶わない。『桜の園』では、時代に取り残された人々の悲哀が、幸福だった時代の象徴である桜の園が失われるという喪失感をともなって描かれる。学生時代にこれらの戯曲をいわば教養として読んだが、その時にはなぜチェーホフがこれらの戯曲を「喜劇」と呼んだのかについて考えようとはしなかった。人生におけるわたし自身の経験という判断材料が少なすぎて見当がつかなかったのだ。『チェーホフ 七分の絶望と三分の希望』を読み、なぜこれらの戯曲は「喜劇」なのか改めて考えてみた。「三分の希望」、「希望」は「光」と読み換えることができる。三分の「光」とは微かな光のことである。「絶望」とは『聖書』的なイメージに置き換えるならば「穴」、その「空虚さ」であろうか。「穴」も「光」も、俯瞰して見ればどちらが勝者であり、どちらが敗者であるとも言えない。もしかするとチェーホフの目は鳥の、猛禽類の目をもっていて、その目を通して見られたとき、作中人物たちはみな人生という舞台の上で右往左往する滑稽な群像に映っていたのだろうか？冷静な目、医者でもあったチェーホフは結核菌に冒された自身の病状、余命さえ冷静に計算していたのかも知れない。そうであるならば、これらの「喜劇」はチェーホフ自身の生命の代償だったと言えないこともない。

わたしたちは皆、人生という舞台で踊らされている愚かで切なく、そして美しい存在であるというチェーホフの声がわたしには聞こえる気がする。